## 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	李笠翁と日本の戯作者
Sub Title	Li Yu and Japan's gesaku writers
Author	岡, 晴夫(Oka, Haruo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1997
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.73, (1997. 12) ,p.574- 586
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	安藤伸介, 岩崎春雄両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00730001-0586

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 李笠翁と日本の戯作者

## 岡晴夫

は としてではなく、〈戯作〉という特異な視点から成されなければならないと私は思っている。 李漁 彼がいわゆる〈戯作者〉であるということであろう。従ってその作品に対する見方や評価は、ごく一般通常の文芸 (笠翁、一六一一─一六八○)という文人・作家の実像を把握するうえで、欠くことのできない大切なポイント

ると言えるであろう。笠翁の戯曲および小説は、その内容や性格から見て〈戯作〉と同一視し得るものなのである。 〈戯作〉とは何か、これをごく簡略に規定するならば、わが江戸期に生まれた一種の「娯楽文芸・遊びの文芸」であ

文)。まさしく笠翁文芸の本質本領にふれて核心を衝いた、非常に重要な発言であるとして注目したいと思う。すなわ を容易には捉えにくい、複雑に入り組み屈折した精神構造の持ち主であるといってよい。それが何に由来するかといえ 笠翁の友人尤侗 つねに 〝狡獪の伎倆〟を発揮し駆使しようとする笠翁なる戯作者は、実にしたたかな曲者なのである。 (展成)は、彼の文芸を評して「狡獪の伎倆を用って游戯の神道を作す」と謂った(『閑情偶寄』序 そのすがた

ば、結局は〈卑下慢〉という気分・気質に依るであろう。みずからの才能や学識に対しては人一倍強烈な自信と自負心

一方においては、 ぬぐい去りがたい自卑の心・自嘲心がある。 心の奥深いところで〈戯作者〉であるこ

とに、負い目や引け目・不面目を感じ背負いこんでいるのである。

の強固な中国においては蔑まれ、 ķγ たのであり、 まずは科挙に挫折し、文人としては完全にアウトサイダーとして生きて、きわめて通俗卑俗な小説戯曲を書 しかもそれは好色と滑稽を特徴とする、いわば位取りの点で一段と低いものであった。とくに建 尚雅の精神を基底とする正統派文人の伝統的感覚からは、 当然排斥されるべきものだ 前 原則

には、若い妾たちに芝居を仕込んで、これをひき連れて行って自作の戯曲を演じさせ、パトロンのご機嫌をうかがうと に応じて、 こうした小説戯曲で有名人になった彼は、ほかにもさまざまな特技や才能があったから、 彼らの間を食客として渡り歩いた。 みずからこれを〝托鉢〟と称して、 たかり生活をしたのである。 全国各地の名士富豪の招き その折

かり生活をする、そして同時に商売人でもあるという、文人としては真当ならざるものであった。 の手に成る小説戯曲は、 していけなかったから、 読者観衆に媚びた卑俗なものであったし、それに彼の生業や生き方も、『高等幇間』としてた 出版販売業をも営んだ。 目端の利く商売人として商才にもたけていたと思われる。 いった行いをし、いわば文人くずれの〝高等幇間〟として世過ぎしたのだった。また、こうした〝托鉢〟だけでは生活

われる。彼がしばしばみずからを指して「賎者」と規定しているのは、 して普通・尋常・真当なるものではないという自覚なり自意識が、彼自身の心中に潜在していたのは当然であろうと思 笠翁がみずから払拭しきれぬ負い目や不面目を背負っているについては、その証左となる事柄を他に何点か指摘でき その最も端的なあらわれであろう。

明末清初という時代には大幅に許容され容認されたのは事実だとしても、

それがやはり文人と

そのような生き方が、

るのではないかと思う。ここからも彼のコンプレックスを察知することができるであろう。

まず第一に、笠翁には歴史を論じた『論古』(『笠翁別集』巻一)があるが、そのなかでかの東方朔が『史記・滑稽列 『滑稽』として軽んぜられていることに対して、大層ムキになって怒り憤り、作者の司馬遷を「腐史」と罵っ

ているのである。

と此の若きなるかを知らざる也。豈に千古不决の疑案に非ずや。(「論東方朔諫内董偃置酒宣室」) に在らず。史氏察せず、乃ち滑稽を以て之を軽んじ、優孟諸人と併歯す、冤なる哉。……朔は又一代の通儒にて其 の学術は董仲舒の下に在らざること知るべし矣。……吾、朔は腐史と何の讐ありて、遂に其の凌り賎しめに遭ふこ 武帝の名臣はまさに首に董仲舒・汲黯を推すべしと。予謂へらく、 東方朔立朝するに、 風采二臣の下

憤っているのである。笠翁の屈折したコンプレックスを、ここに明らかに見て取ることができると思う。 これは言うまでもなく、「滑稽」として凌り賎しまれていた東方朔に、笠翁が自分自身のすがたを完全に重ね合せて

著はすに非ず」(「曲部誓詞」)とみずからも言うように、平素は表面上あくまでも穏やかで、ひたすら低姿勢を示して ヒステリックではない。 いると言ってよい。つまり、舌鋒の鋭さとか辛辣さといったものをいっさい持たず、決して攻撃的ではなく、 笠翁は、 そもそも激昻したり悲憤慷慨したりはしないタイプの人間である。「不肖硯田に餬口し、原憤を発して書を 可能な限り柔軟な軽いフットワークをもって姑息に行こうとする、 それがむしろ笠翁について

言える大きな特徴なのである。ところが、ほとんど他には例を見ることなく東方朔の扱いについてのみここで猛然と憤

る。 第二に指摘したいのは、 当時説書家として赫赫たる名声を馳せた柳敬亭(一五八七─約一六七○)に関わることであ

た文士諸大家は枚挙に暇がない。袁于令『双鶯伝』・孔尚任『桃花扇』等のように、 翔等は彼のために伝記を書き、 の非常に大勢の詩人文人たちが、さまざまに取りあげて言及しているのである。例えば、呉偉業・黄宗羲・周容・沈龍の非常に大勢の詩人文人たちが、さまざまに取りあげて言及しているのである。例えば、呉偉業・黄宗羲・ 彼についていえば、いわゆる〝芸人〞でこれほどの著名人は他にいないと思われる人物であったから、 銭謙益・龔鼎孳・余懐・杜濬・張岱・冒襄・毛奇齢・閻爾梅その他、 彼を劇中に扱った戯曲作品もある。 詩文に讃辞を寄せ 明末清初期

同様にストーリーの面白さとその組み立て方に心をくだいた笠翁が、そうした話芸の名人と謳われた柳敬亭に全く 李笠翁には一言も彼について触れたものがない。 口舌の面白さで聴衆を釣ろうとするのが説書家である

「凡そ明末清初の著名な詩人で彼に言及しないものは少い、といって過言ではない」(福本雅一氏『明末清初』)ほどな

583

すなわち、 この場合笠翁の彼に対する心情心理には、 かなり複雑な屈折したものがあったのではないかと思われ

興味を示さなかったはずはなく、それはむしろ非常に考えにくいと言わなければならない。

俳優目之」(『曲海総目提要』)と言われたのである。だから芸人まがい、芸人ふぜいの生業に身を置いているというこ なぜならば、 笠翁自身が『芸人』に等しいと見なされていた文人であった。そう言われても仕方がないし、

わば柳敬亭と同じ〝芸人〞仲間の同業者であるという負い目を深く意識していたはずである。が、

一方において

٤

rV

ことになったのではなかろうか。 は、文人知識人としての強固なプライド・自負心があった。そのプライドや自負心が敢えて完全に柳敬亭を無視させる

や抵抗もなく柳敬亭にあい対し、これを筆にすることができた。ところが、心中に卑下と倨傲が同居し錯綜して、 えに、柳敬亭に対しては殊さらにこれを無視して言及することを避けたのではなかろうかと思われるのである。 して奇妙なこだわりやわだかまりの気分をもつのが、いわゆる〈戯作者〉の精神構造である。笠翁の場合もまたそれゆ 李笠翁と他の一般文人との間には、このように心の奥底に深い負い目やこだわりを持っているかどうかという点で、 他のごく一般通常の文人知識人たちには、 当然ながら笠翁のような負い目や引け目はなかったから、 何のわだかまり

明らかに異なり一線が画されていると私は考えている。そのちがいは例えば、文集に収録され残されている尺牘によっ

笠翁は当時の名だたる文人たちとたいへん幅広く交際していた。『笠翁一家言』にはそうした交遊を示す尺牘文が百

てみても、ある程度推測されるのではなかろうか。

えた書簡があったはずであるが、彼らは自己の文集にはそれらをいっさい残していない。 ていたか、 篇以上も収録されていて、その一斑をかいま見ることができる。彼は自分がいかに多くの文人名士たちと親しく交際 彼らに与えた尺牘の内容を細大もらさず伝え残そうとしたのである。逆に、文人名士たちの側にも笠翁に与 (展成)の『西堂雑俎』、あるいは杜濬(于皇)の『変雅堂遺集』には、 笠翁宛ての尺牘を一通も見出 例えば笠翁と特に深い交遊関

ても晴れがましいことであった。一方、時の名士たちにしてみれば、いわば『芸人』ふぜいの笠翁とつき合ったとして 笠翁にしてみれば、 自分がいかに時の多くの名士たちと交際していたかを誇示したかったのであり、 すことができないのである。それはどうしてであろうか。

しろ隠蔽しておきいほどのことだったかも知れない。だからこそ笠翁あての尺牘があったとしても、それらは意識的に Ł それは決して別に名誉でも何でもなかったし、 後世に残そうなどとは思いもしなかったのである。それどころかむ

みずからの文集に収録することをせずに省いたのであろう。そのように理解するよりほかないのではなかろうか。 いずれにせよ笠翁の心中には、拭い去りがたい負い目がありコンプレックスがあった。文士としての位取りの高さと

いう点で、 自分が一段と低い者だという自覚があって、強くこれにこだわっていたのではなかろうかと推察されるわけ

笠翁の文芸の性格を示すキイワードとなっているようにも思われる。例えば次のように言う。 次に注目し指摘したいのは、笠翁がしばしば好んで口にする「嗜痂 (偏好)」ということばであり、これはそのまま

٨ ……凡そ余の生平の著作、 (『閑情偶寄』 器玩部 皆此に萃む。嗜痂の癖有る者、此を貿ひて以て去らば、笠翁を偕にして帰るが如くならい。

噫 吾老いたり矣、 用ふるに足らざる也。請ふ、崖略を以て之を簡篇に付し、 嗜痂の者の采擇に供さんことを。

(同、居室部

物あじのものだと謂っているのである。さらにまた、このようにもいう。 これらが彼一流の戯謔の口調であるのはいうまでもないが、みずからの作品をもって風変りなおもむきのもの、下手

自性があるのであるから、そこをこそ評価しなければならぬであろう。笠翁はまた得意気に次のようにもいう。 戯曲も小説も捻りに捻った趣向によるまことに面白い風味のものであり、そこにこの作者特有の個性、 直っているのである。こういう風変りな面白いものが、いったい自分以外の誰に書けるか、これらは天下一品であると いうしたたかな自信をウラに秘めてもいるのである。事実たしかにその通りなのであって、『閑情偶寄』もまた然り、 「著書千巻」は、真当な味わいのものではない風変りなおもむきのものなのだと殊さらに言ってみせ、そこに傲慢に居 これは笠翁自身の文筆著書の本質を、 かなり率直に表白していると解してよかろう。自分が一生のうちにものした 他に比類ない 独

漁自ら甘泉に抵り、 大將軍の揖客と爲りて、 捫虱の迂談を肆にし、 嗜痂の偏聽を聳たしむ。 (「寄謝劉耀薇大中丞」)

しなのであって、 てみせることができるというところが、実は注意を要するところなのである。 みせる、コケにしてみせるということがある。これは誰も傷けない最も危険のない安全な笑いであるが、このコケにし して述べ立てているところがいかにも笠翁らしいといえる。彼の滑稽の才のうちで一つの特徴は、 恐らくこれは笠翁の弁舌に長けた オモテかと思うとウラがひそんでいる、そのあたりの底意というものをぜひとも読みとらなければな ″高等幇閑″ ぶりを十分窺わすに足る言い草であるが、それをまたヌケヌケ得得と これはつまり強い自信と自負心のウラ返 自分自身を貶しめて

らない。

数例を見てもわかるとおり、 の作品について《風変りなもの》といっているのではない。そこが実は注目すべきところであって、 ったのである。 を見出すことができる。一風変ったもの個性的なもののなかに独自の価値を見出し喜ぶという風潮が、 いっているのである。そしてたしかに「嗜痂者」好みとも言いうる一風異なった独自の味わいを帯びているのが、 姤 たとえば馮夢龍や尤展成・張潮等々の文章のなかにも散見するが、 ということばについてみるならば、 自己の著述・言説に向けてこの語を用い、それらが 笠翁にのみ限らず明末清初期の文人の著作中に少なからずその 「嗜痂者」を喜ばす風変りなものだと しかしそれらはいずれの場合も自己 笠翁は右に示した この時期にはあ ほか 甪

はない。 譬えていうならば、 むしろ路地裏にある赤提灯風の一杯吞み屋、そこで出される下手物風味の珍妙なる味わいの小料理である。 それは決して表通りにある然るべき構えの立派なレストラン、そこで出される正式真当の料理で 両

ならぬ李笠翁の作品なのである。

用 者は、 けてさし出すというようなことをする。 は 分本位のムダな文学、『無用の文学』なのだということになる。マイナーの文芸たるゆえんである。 るから、そうした「狡獪伎倆」による煙幕にまかれてしまっては、まんまとその手の中に落ちることになってしまう。 ところで〈戯作〉なるものは、とくに思想というようなものをもたず、とり立てて何も主張しない、 なるものがあって、 往々にしてその赤提灯風の店をもっともらしい構えのレストランのごとくに装い、然るべき料理のようにも見せか 格調の高さという点では大きな開きがある。 それが戯作のよさではあるものの、ともあれ〝有用の文学〟ではないというところから、 眉唾な胡散くさい表現をしてみせるのがいわば戯作者流のレトリックなのであ いわゆるメジャーとマイナーの差であるといえよう。ところが笠翁 もちろん 従ってい 無用 わば気 その

(戯作者)

はややもすれば心中にある種の後ろめたさや負い目引け目を抱くことになりがちである。

創作するにあ

から、とくに学識に富み醒めた眼をもつ戯作者たちには、空しさにも似た感情を抱かせるようである。それは、自分が たっては懸命に努力し苦労しながらも、そのすえにできた作品が読者に単なる慰みを提供するにすぎないというところ

無用の文学にたずさわる無用者だという意識でもある。

賢るのむだ書」(『放屁論後編追加』)と嘯き、 V る。ここには、 戯作界のボス的存在である平賀源内は、 みずからふり返ってみて実のない虚なる人生であったという、 また最晩年には、「功ならず 名ばかり遂て みずからの著作が徒労であることを自嘲してそこに居直り、「已に 言い知れぬ空しさ苦々しさを伴なった 年暮ぬ」という句を詠んで

感懐詠嘆がこめられているのである。

……実学者に出あひては、 はずであるが、 めから戯作者たらんことを目指して励んだ大立者が、山東京伝であった。彼には従っていわゆる鬱屈や屈折 自分が戯作者で虚名を貪ったということ、また筆禍に遭ったことを、後に国学者となった若き友人の黒沢翁 自作黄表紙のなかで「戯作者ばかり羨ましからぬものはあらじ。 一言も流しにいずるとぶ鼠のごとく、尻尾をまいて逃げつべし」(『作者胎内十月図』)と言 人には糸瓜の皮のように思はるるよ。 がない

結局戯作者としての負い目や無用者意識から脱け出ることができなかったといえよう。 る。つまり戯作から学問研究の実学へと転向しているわけで、その温和で誠実な人柄ゆえの心情の変化が注目される。 が第一だと勧めてもいるのである。そして晩年には国学の研究考証に執着してその方を主とし、 麿宛て書簡のなかでしきりに後悔しており、 戯作は渡世のためにやむなくやっていることを切々と訴え、 戯作の方は従にしてい 和学に志すの

もしるき架空の言、 戯作界の巨匠・曲亭馬琴について見るならば、 畢竟、 遊戯三昧にて、毫も世に稗益なし」(『八大伝』「九輯」巻三十三簡端付録作者総自評) 彼は 「稗官小説は鄙事也」(『作者部類』) と論断し、 と開 はで

— 577

ったと考えざるを得ないように思われる。 なかったからであり、それは結局、 琴が一貫してこれほどまでに勧懲にこだわったのは、性格的にきまじめだった彼は、せめてこれにすがりつくよりほか 懲を手づよく示し候が拙者癖に御座候」(『曲亭書簡集』)と言って、みずから勧善懲悪にこだわり続けたのだった。馬 き直った。 また、学才に恵まれながらも仕官運動に失敗し、市井の浪人儒者として生きたのが寺門静軒だった。彼は漢文戯作中 と同時に、「大約小説は、 戯作者としての無用者意識、その屈折したコンプレックスの然らしめるところであ 勧懲を宗とせしものならざれば、 弄ぶに足らず」(「詰金聖嘆」) とし、 動

いるのである。 まず」と言い、「吾は固より無用の人なり、何の暇か能く有用の事を爲さん」(『柳橋新誌』)と述べて、強く開き直って 自己規定して野にかくれたのが成島柳北である。彼は、「真に天地間無用の人と爲れり、故に世間有用の事を爲すを好 て、 第一級の力作といわれる『江戸繁昌記』の冒頭で、 静軒が「無用之人」を標榜しながら実は有用の世界に未練を残していたのに対して、 、「嗟ぁ 斯の無用の人にして、 斯の無用の事を録す」と述べた。そし 掛け値なしに「無用之人」と

陵、 しかし結局はやはり同じ戯作者として共通する感慨を洩らしているところは、ぜひとも注意を要するであろう。 た数例を見てもわかるとおり、総じてたいへん単純ストレートに吐露され表現されていると言えるであろう。これに対 して李笠翁の場合には、 例えば「過子陵釣台」と題する詞がある。後漢の光武帝に招かれたが応ぜず、隠者で通したという高潔の士 これら日本の戯作者たちの自嘲・卑下・負い目・不面目といった感情あるいは 彼が釣りをしたと伝えられる台を通ったときの感慨を詠じたものである。「厳陵を過れば(5) 日本の戯作者たちほど単純明瞭ではなく、 隠微にしてかつしたたかな表現をとることが多い。 ″無用者意識』については、 釣台は咫尺なるも登り ・厳子

難し」の初二句からしてすでに、自分にひきくらべて子陵が到底手の届かないかけ離れた存在であることを暗示する。 まずは已れのすがた容貌の醜さをのべ、「同に綸竿を執り(共に蓑笠を披るも) 君の名は何ぞ重く我は何ぞ軽き」と言 たか

と(子陵が帝に聘せられて共に偃臥したとき帝の腹に足をのせた故事「客星犯帝座」を踏まえて)自嘲する。そして、 り生活をし手ぶらで帰るのを愁えるような自分であるから、天文官の誰が客星が現れたなどと帝に奏上したりしようか 「相い去ること遠し 君は厚禄を辞し《我は虚名を釣りぬ』と嘆ずる。後闋では自卑自嘲の念を一段と強め、

見られる徹底した自嘲自卑の口吻と、 他日またこの地を過るときには、 羞ずかしさに目を見開くこともできまい、と言って一篇を結んでいる。 逆にそれを表出せしめる開き直りの情の強靭さに、 ぜひとも注目したいとおも ――この詞に

う。

る無し」と詠じている。これは、ちょうど先に示した曲亭馬琴の発言 す二公の癖」と言い、続けて「嘗て歓喜の心を以て「幻し爲せり游戯の筆 呂祖は游戯の仙 弥勒は歓喜の佛」と詠いおこして、いかにも喜劇作家らしく「我は佛に非ず仙に非ざるも 「畢境、 書を著はす三十年なるも 游戯三昧にて、毫も世に稗益なし」と、 世に于て損益す 饒かに有

もう一つ取りあげたいのは、「偶興」と題する五言古詩である。「仙を学びては呂祖を学び

結局同一趣旨をのべていることになる。注目すべきところであろう。 しまん またさらに笠翁は、「但願はくは世間の人 斉しく極楽の国に登らんことを 一刻苦悩を離るれば 吾が責は亦塞がると云はん」ともいう。それらには、 縦使長久なり難しとも 自己満足とサービス精神に生きた 亦且 く朝夕娯

″戯作者″ これらの詩詞に見られる李笠翁のこころは、「功ならず . の 自負と孤独 自己主張と自嘲の心の双方が、 名ばかり遂て 同時に混在し錯綜しているのである。 年暮ぬ」と詠じた、かの平賀源内の心境と

佛を学びては弥勒を学ぶ

も、一脈通じ合うものが認められると思う。

ある。 念いでもある。そういう念いや感懐があったからこそ、笠翁にはみずからの全著述を集めて『一家言』としてまとめ 于世無損益」とのべる笠翁の感懐、これこそ日本の戯作者たちのあいだに通有する『無用者意識』にもつながるもので それは、 いま一度くり返すならば、「君名何重我何軽」といい、また「我釣虚名」という、さらに「著書三十年 戯作者として生きたおのれの人生をふり返りみて、 実のない虚名をのみ馳せたという、侘びしい空しい

後世に名を残したいという願望も、またひと一倍強固だったに相違ないと思われる。

〃一大レストラン』のなかにあって提供される、 イプの文人は、 そして笠翁は、その異才によってたしかに後世に名を残すほどの著名人となったのであったが、 中国文学史上およそ他に類を見ず、ひとり突出し際立っているのである。それはいわば中国文学という まさに比類ない独特の風味、珍妙なる味わいの一品なのだということ 彼のような戯作者タ

Ë

ができるであろう。

- 1 まな趣向をこらして創作する、趣向重視の文芸であること。 と。闫読者に慰みを提供するという姿勢から、俗に居直り娯楽性をこそ強調するものであること。衂そのためにさまざ 対置する、 〈戯作〉の特性としては以下の四点を指摘し得るであろう。───いわゆる正統派・本格派のメジャーの文芸とはあい 非正統派のマイナーの文芸であること。口作者みずからが慰み戯れに筆をとり、 遊戯精神が横溢しているこ
- $\widehat{2}$ 尤展成は言う――「武林李子笠翁、 楚娥』、蓋実録也」(『名詞選勝』序)。詳くは拙稿「李漁評価に関する考察」(『芸文研究』第五十四号)第五章参照 能爲唐人小説、尤善金元戱曲。 呉梅村祭酒嘗贈詩云『江湖笑傲誇斉贅、 雲雨荒唐億

3 『説書芸人柳敬亭』(上海文芸出版)、『説書史話』(人民文学出版)、『揚州曲芸史話』(中国曲芸出版)

拙稿「戯作者気質――李笠翁とわが国と――」(『新日本文学大系』第八十巻・月報33、岩波書店)

参照

4

- $\widehat{\mathbf{5}}$ 卑已隔千層。 原詞:「過厳陵、釣台咫尺難登。 共披蓑笠、君名何重我何軽。不自量、將見高比、纔識敬先生。相去遠、君辞厚禄、我釣虚名。 君全交未攀袞冕、 我累友不恕簪纓。 為舟師、計程遙発、不容先輩留行。仰高山、 終日抽風、只愁戴月、 司天誰奏客為星。羨爾足加帝腹、 形容自愧、 俯流水、 再批評、 面目堪憎。 太史受虚驚。 一生友道、高 同執綸竿、
- 6 非佛非仙、 原詩:「学仙学呂祖、学佛学弥勒。呂祖游戯仙、 知他日、再過此地、有目羞瞠。」 饒有二公癖。嘗以歓喜心、 幻為游戯筆。著書三十年、于世無損益。 弥勒歓喜佛。 神仙貴洒落、 胡為尚拘執。 但願世間人、斉登極楽国。 佛度苦悩人、 豈可自懮鬱。我 縦使難久長、

亦且娯朝夕。一刻難苦悩、吾責亦云塞。 **還期同心人、種萱勿種檗。**」

典籍與文化』同年第三期掲載)に基づいて整理したものである。

本稿は、

九九五年三月二十七日、

北京大学古文献研究所および中文系の要請に応じて講演したときの筆録

**- 574 --**

(『中國